

と、お仙はうろたいた。

「あッ、爺や、助けてよう。」

と、正夫は叫んだ。

「おう、若様か、汝ッお仙……手前えは若様をお連れ申して行つて、何んとするのだ。」

と、佐吉は眼を怒らせた。

「何うしやうと、大きにお世話だ、それ程聞きたくば聞かせてやらう、この餓鬼を連れて行つて、一儲けするのだよ、さアグヅ〜として邪魔すると承知しないよ。」

「何ッ、汝はまだ悪い了見が直らねえのかッ。」

「何を佛臭い事を吐してゐやがるんだい、私やお前みたいなグヅとは違ふんだよ、そこをどいておくれッ。」

「いや、ならね、えさア若様を渡せばよし、さなくば手前の命はねえぞ。」

と、佐吉は腰に下げてゐた鎌を振り上げた。

「へ、ン、洒落た真似をするね、お前が退かなきやどかして見せるよ。」

と、慌てゝピストルを帯の間から出して、ネライをつけた。

「あッ、危ねえッ。」

と、佐吉は樹立に身をひそめて、

「汝ッ、飛び道具なんか出しやがったなッ。」

と、シリッ〜つとつめよつた。

と、轟然一發!

「佐吉はバツタリと仆れた。」

「態々見やがれッ。」

と、云ひ捨て、お仙はまたもバタ〜と馳け出した。

「待てッ。」

と、佐吉は刃を起した。

『あれッ、まだ死なねえのか。』

と、お仙は振り返り様、一發！、二發！！

凄（ひど）い響（ひび）は樹立（じゆりつ）に山彦（やまひこ）をうつて、鳴（な）り渡（わた）つた。

佐吉（さきち）はその度（たび）に地（ち）に伏（ふ）しつゝお仙（おせん）の後（あと）を追（お）つた。

『爺（ぢや）や、助（たす）けてよう……』

と、またしても正夫（まさむ）は叫（さけ）ぶ。

『若様（わかさま）、暫（しば）りの御幸棒（ごしんぼう）です、待（ま）つてゐて下（くだ）せえ。』

と、佐吉（さきち）は焦（あせ）りつゝもヂリ／＼と追（お）ひつめて行（い）くのであつた。

お仙（おせん）はまたも一發（いっぱつ）打（うち）つた。

そしてフト氣（き）がついて見（み）ると、後（あと）一發（いっぱつ）しか残（のこ）つてゐないので、こりや困（こま）つた事（こと）に

なつたと思（おも）つたが、佐吉（さきち）がいよ／＼近（ちか）くへ追（お）ひつめて來（き）たので、突（とつ）差（さ）の間に氣（き）がつ

いて、正夫（まさむ）を地上（ちじやう）に組（く）み伏（ふ）せて、正夫（まさむ）の喉（のど）へピストル（ピストル）を當（あ）て。

『さア見（み）ておいで、佐吉（さきち）、お前（まへ）が、そこら一寸（いちゆん）でも進（すす）んで御覽（ごらん）ん、それと同時（どうじ）に

この餓鬼（がき）の命（いのち）はないのだ。』

と、今（いま）にも引金（ひきかね）を引（ひ）かん有様（ありさま）に、佐吉（さきち）は地團駄（ぢだんだ）を踏（ふ）んで口惜（くちやく）しがり。

『チエツ、ざ、殘念（ざんねん）だなア……あッ危（あぶ）ない、お仙（おせん）、待（ま）つてくれ。』

と、佐吉（さきち）は思（おも）はずも叫（さけ）んだ、

『さア、後（あと）へ引（ひ）つかへすか、何（なに）うだ。』

と、云（い）つて、この儘（まま）……』

と、氣相（きさう）かへて、一足前（ひとひしまへ）へ出（で）んとするや。

『おつと、餓鬼（がき）の命（いのち）はないよ。』

と、お仙（おせん）に云（い）はれて、ハツとした佐吉（さきち）、思（おも）はずも一足戻（ひとあしもど）つた。

『あは／＼／＼、お前（まへ）の様な馬鹿（ばか）が、私（わたし）を抑（おさ）えやうたつて、そんな手（て）に乗（の）る様なお仙（おせん）

さんとお仙さんが違ふんだよ、さア憐うなりや、何も彼も云つて聞かせるが、この
餓鬼を玉にして、黒川の旦那と一金儲けさ、安河の財産は濡手の粟の掴み取り、些
と五百萬圓はお手の筋さ、はゝゝゝ。』

と、頻りに悪體を吐いてゐると、佐吉は身をふるはして口惜しがつたが、何うす
る事も出来なかつた。
此時！、子供心にも必死であつた正夫は、お仙の隙を見て、矢庭にピストル持つ
手にガブリツと喰いついた。

子供の事とて、さして痛くはなかつたのであつたが、不意をうたれた事とて。

『あッ。』

と、思はず叫んで、ピストルを落してしまつた。

『汝ッ。』

と、この様子に力を得た佐吉、勇氣百倍して、猿の如くに馳り來りて、お仙の髪

り返る暇もなく、ザツクリと、利鎌を打ち打した。

『呀ッ。』

と、叫んだお仙、バツタリと傍へ仆れた。

ドク／＼と流れる血潮……………」

『ウム……………」

と、お仙はのたうち廻つた。

『悪婦、悪人の最後思ひしれッ、親の敵ッ。』

と、佐吉は叫んで、ザツクリと喉へ……………」

『ウ……………」

死の叫びの一聲……………」

お仙はもろくも息絶えた。

『爺や……………」

と、正夫は佐吉に縋りついた。

「おう、若様……………」

と、しつかりと抱きしめて、片手で利鎌の先から、ぼたくと流れ落ちる血の雫をジツと眺めて。

「俺はとう／＼やつてしまつた……………」

と、ドツカと尻をつくと同時に、吻つと深い吐息をした。

「爺や……………何うしやう……………」

と、正夫はふるえて佐吉に抱きついた。

「お、若様、御心配なさいますな、爺やがついてゐますぞ……………」

と、口には云へど、人殺しを犯した身體、あゝもう生きて居られぬ……………何うせ一度は死ぬ身俺も此處で腹切つて……………

と、思つた佐吉、ジツと鎌を見つめて、またお仙の死體を眺め。

「お仙、假令、毒婦とは云へ、一度は俺の女房だ、何うかして眞人間にしてえと、

どれだけ思つたか知れなえが、手前はやつぱし神様のお憎し味をうけて此の最後だ何うか次の世に生れ出る時は、眞人間でゐてくれよ……………俺も後から行くからなア。」

と、我れと我が腹に鎌を突き立てんとするや、正夫は驚いて、その手に縋りつき。

「爺や、死んぢや厭だよ、死んぢや厭だよ。」

と、泣き叫ぶ、

「お、若様……………」

と、死ぬに死なれず、泣きの涙で迷つてゐる處へ。

「おう、佐吉さんぢやねえか。」

と、ヒョッコリ現はれたのは三次……………

「おう、お前は三次ぢやねえか。」

「とう／＼やつたな。」

「ウム……、俺もやつぱり真人間の道は踏めねえかつたのだ。」

「佐吉さん、心配しなさんな、この罪は俺が引きうけた、早く若様をつれて行つて下せえ。」

「いや、さうはならないよ、俺は今こゝで死ぬから、何うか後の事を頼む。」
と、佐吉は鎌を取り上げた。

「待つた……待ちねえよ。」
と、その手を確く掴んだ三次。

「俺も省三様に助けられて、いろ／＼と神の道を教へられて、迷ひの夢がさめ、ブツツリと悪事をやめて真人間になつたのだが、何うせ満足に死ぬの身體だ、今までの罪ほろぼしに、俺が此場を引きうけたから、何うかお前さんは早く若様をつれて此場を立ち退いておくれ。」

「いやさうはならねえ。」

「佐吉さん、お前さんの心としては、尤もの事だがお前さんはまだ死ぬゝえ身體だせ。」

「えッ。」

「妹のお君さんや若様の事を何うするつもりだ、安河家の悪人を何うするつもりだ、よく心を落つけて考へて下せえよ、安河家は今危機一發の場合だ、誰がそれを救ふのだ、みんなお前さんの役目だ、佐吉さん、お前さんはまたなか／＼死ぬの身體だせ。」

「ウム。」

と、佐吉は首垂れた。

「さア、何も考へる處はねえ、此場は俺がいゝ様にするから、早く若様をお連れ申しておくんせええよ。」

「それちや三次さん、何も云はぬ、何うか後の事は頼んだせ。」

「あゝ、いゝとも。」

「さア若様、爺やに背負なせえ。」

と、正夫を背負つて立ち上り、

「三次さん。」

「おう、佐吉さん。」

と、互ひに顔を見合せて。

「それちや頼んだよ。」

「あゝ、いゝとも………身體を大事にね。」

「有難う。」

と、云ひすて、佐吉は馳け出して行つた。

その後をいつまでも見送つてゐた三次は、お仙の死體をジツと見下して、思はず

はつとして。

「あゝ、俺もやつぱり此の世に生きてゐられねえのだ、今が年貢の納め時だ。」

と、ピストルを取り上げて、ドンと一發！

佐吉は血吹雪の中に打ち仆れた。

* * * * *

「おう、そこへ行くのは市川君ぢやないか。」

と、聲かけられて振り返つた佐吉。

「おう、先生でしたか。」

「大層、顔色を変えて、何うしたんだね。」

と、省三は不安さうに聞いた。

「先生、私はとうとう人を殺してしまいました。」

「えッ、人殺をしたッ。」

『はい、お仙と云ふ黒川さんの妾が、若様をさらつて行つて、安河家の財産を横領しやうとしやがつたので、若様を救ふ爲めまた安河家の一大事の爲めに、とうくやつてしまひました。』

と、佐吉は吻つと切なげな吐息をした。

『とんだ事をしてくれたなア……』』

と、省三は腕を拱いた。

『私はその場を去らず腹切つて死なうとした處へ三次が来て、今死ぬ時ぢやねえ、安河家の事や、お君や若様を何うするつもりだ、此場は俺が引きうけたから、早く行けと申しましたので、心ならずも若様をお連れ申して來ましたので……』』

『あゝそれぢや三次は今頃、お前の身代りに死んでしまつたな。』

『えッ、何うして、御座います。』

『彼の氣性として、必ず死ぬに違えない。』

『そりや、飛んだ事をしてしまつた、私はこれから行つて……』』

『いや、今更行つたつてもう間に合はぬ、それより三次の眞心を水の泡にしない様にしてくれ、それが彼に對する何よりの花向けだ。』

『はい……』』

と、佐吉はほろ／＼と熱い涙を流した。

あ ら そ ひ

海岸に向つた安河家の別荘の庭園に、兼子と唯也は向ひ合つて。四阿のベンチに腰を下して何か話しをしてゐた。

『何うです、兼子さん、正行の實印をまだとれませんか。』

と、唯也はもとかしさうに云つた。

『まだ取れないんで、何うする事も出来なくつて、困つてゐるんですよ。』

「弱つたなア、實際……」

と、シリ／＼した様子で。

「一體、此方へ来てから、幾日経つと思つてゐるんですね。」

「さうですね、もう一ヶ月程経ちませうね。」

「一ヶ月も経つなんかと、よく貴女は呑氣な事を云つて居られますな。」

「よく貴方は私の事を呑氣々々と仰有るけれど、御自分だつて呑氣なものですよ。」
と、兼子はシロリと、唯也の顔を見た。

「へえ、私がですかね。」

「白はくれるものぢやありませんよ、何うせ私の様な婆は捨てられるのは當り前ですけれども、併し餘りですよ。」

「何が氣に觸つて、そんな事を仰有るのです、貴女と私とは夫婦も同然な仲ぢやないんですか、さう嫉妬をやく事はよして下さらんと困りますな。」

「別に嫉妬をやく譯ぢやないけれど、貴方は私を盲目だ思つて被在るから、腹も立つのですよ。」

「一體、何をさう怒つてゐるんですね。」

「あれですものね。」

と、兼子はいま／＼しさうに云つて。

「お仙と云ふ女は、あれは一體何者です。」

「は／＼、あの女ですかね。」

と、唯也は事もなげに笑つた。

「随分ですね、貴方は、そんなに平氣な事を云つて居られるんですね。」

「貴女もまた考への浅い方ですな、考へて御覧なさい、大きな仕事をお互にやつてゐるんですよ、その仕事の手先につかつてゐるんぢやありませんか。」

だつて、奥様だつて、邸の者に云つてゐると云ふぢやありませんか、私と云ふもの

があり乍ら、他に女を拵へて……それもよう御座いますよ、面當てらしく家へ引張り込んで置くなんて。』

と、兼子は口惜しさうに、眼に涙さへ浮べてゐた。

『弱りましたなア、けれど私の考へを一通り聞いて下さいよ、いゝですか、あの女を手先に私がつかつたのは悪かつたかもしれません、併し弱點を握られてゐる今日うつかり捨て、御覽んなさい、どんな事をされんとも限らないから、まア長い事でもないから、事の成就するまであゝして、勝手な事をさせて置いて、出来上つた上に、ぼんと投げ出すんだから、いゝぢやありませんか。』

『すると私もやつぱりその組なんでせう。』

『申談云つちや困りますよ、すべてを一樣に見てゐられるから困ると云ふんです私は貴女を捨てない事を神に誓ひますよ。』

『そりや本當のお言葉ですか。』

『私は立派な紳士です、男です、二言はいたしません。』

『まア本當、それを聞いて私は安心しましたよ。』

と、嬉しさうに十七八の娘の様な態度で。

『ぢや、本當に捨てちや、私は承知しませんよ。』

『御心配はいりません、それより私を捨てると、私はどんな復讐をするか知れませんか。』

『ほゝゝゝ、私は貴方の爲めに命まで打ち込んでゐるんぢやありませんか、少しは察して下さいよ。』

と、兼子はそつと唯也の手を握りしめた。

この時、文子は丸鬚姿で、ツカ／＼と近よつて来て。

『お母様、私困つてしまふわ。』

『何が困るんです。』

「だつて保さんにや、私もう呆れて物が云へませんもの。」

「また夫婦喧嘩ですかい、お母様こそ、ほとく困り抜きます。」

と、兼子は唯也の顔を見て、ニガイ顔をした。

「毎夜、もう藝者買にはつかり行くんですもの。」

と、文子は泣き聲を出した。

「嘘です、嘘です。」

と、突然、後で聲がするので、兼子は吃驚して振り返り。

「保さん、何したんですよ。」

私が夜散歩に出かけると、あゝ云つて嫉妬をやくんで、僕も困つてしまひました

よ。」

「嘘仰有い、私はちやんと、貴方の行く先を突きとめて、證據を握つてゐるんです

よ。」

「それぢやその證據を出して御覽ん。」

「萬水樓つてお茶やへ行つたでせう。」

「いつ僕がそんな處へ行きました。」

「一昨夜ですよ。」

「そりや、友人の交際なら仕方がないぢやありませんか。」

「だつて、それなら一應拒つて出るのが當然でせう。」

「そりや無理と云ふものさ。」

「何が無理です、妻があり乍ら、夜遊びする人こそ無理です。」

「だつて文さん、そりや困るよ、途中であつた友人に、夕飯を喰ひに行かうと誘れ

乍ら、家へ行つて妻と相談して來ると云ふ事が云へますかね、馬鹿々々しい。」

「えゝ、何うせ私は馬鹿です、馬鹿だから貴方に捨てられても、黙つてゐるんです

よ。」

「誰が捨てたと云ひました。」

「云はなくつてもさうぢやありませんか。」

「眞實に文さんには困るなア。」

「私も困りますよ。」

「だから、僕が散歩に行つた途中で親友に。」

「え、ッ親友で被在いませうとも、花千代と云ふ藝妓の親友をね。」

「そ、そりや誤解ですよ。」

と、保は慌て、辯解をした。

「いえ、誤解ぢやありません。」

「いや、たしかに誤解です。」

「嘘ですつたら。」

「眞實ですよ。」

と、互ひに罵り合ふのを、ジツと聞いてゐた兼子。

「まア、お待ちなさい、二人ともなんです、子供見たいな事を云ひ合つて……

…文さん、お前さんも不可ませんまた保さんも不都合ですよ。」

「お母様、何が私が不可ないんですよ。」

「伯母さん、僕は不都合の事はありませんよ、みんな文さんが女の嫉妬から……

……」

「何んですつて、嫉妬ですつて。」

と、文子は眼の色を變へて、チリ／＼とつめよつた。

「まア、お待ちなさい、保さん、お前さんは何故散歩に文さん連れて行か

いのです。」

と、兼子は保をジロリと見上げた。

「だけど、伯母さん、文さんは一緒に歩くのが厭だと、云ふんだもの。」

「當り前だわ、妻をそつちのけにして、藝妓とイチャつかれてゐるのを黙つて見て
わられますか。」

「僕がいつそんな事を、えッ文さん。」

と、文子の手をギユツと握つた。

「あッ痛い……え、口惜しいわね、私もう死しんでまふわよ。」

と、プイと立ち上つて母家の方へ行つた。

「何うも困つたものですね。」

と、兼子は當惑顔、唯也はニヤリ／＼と笑つて、何んとも云はずに笑つて見てゐ
た。

父 と 子

正行はお君に別れて、此の別荘へ来てからは、大層人が變つた様に沈鬱になつた

のであつた。

別れて最う六年……嘸、子供も大きくなつた事であらうと思ひば、まだ見ぬ我

が子が堪らない程懐かしかつた。

逢いたい見たいは山々であつたけれど、家庭上何うしてもそれが出来ず、果敢な

い月日を忙しく暮してゐた。

今日もやる瀬ない胸を慰めんと、庭に出て、ジツと波の音を聞いてゐると、そこ

へ悄然として文子が近づいて來た。

「お兄様。」

「ウム。」

と、正行は氣のない返事で、うつとりと文子を見上げた。

文子は悄然として、俯向いてゐるので、正行は靜かに向き直つて。

「何うしたんだね、大層鬱ぎ込んでゐるぢやないか。」

文子はサメとくと泣き出した。

「何うしたんだ、泣いたつて解らんよさア、おかけ。」

と、優しく文子を傍へかけさせて。

「また保君と喧嘩か。」

「ええ。」

と、微に應へた。

「困つたなア、何うしてお前たちはさう理解がないのだらうな。」

「お兄様、私が悪いのです。」

「さう自分で気がついたなら、何も喧嘩にはならぬだらう。」

「えゝッですから、もう喧嘩はいたしません、またしやうと思つても、最う出来や

いたしません。」

「まア、お互に理解し得るまでは、自分の感情を抑え合ふさ、そして理解し得ると

始めて夫婦の仲が圓滿になつて、楽しい幸福な月日が送れるんだよ。」

と、慙う云つて、正行は何を思ひ出したか、眼に一杯の涙を溜めてゐた。

「ですけれど……………」

と、文子は涙を拭いて。

「私の方で憶えても、到底、私達夫婦の仲は生涯圓滿には行かない事が解つてゐま

すもの。」

「何うしてかね。」

「保は近頃藝妓狂ひを始めたんですもの。」

「ウム、それはうすゝ私も知つてはゐるがね、夫が夜遊びをするのは、何う云ふ

譯からだらうね、一體その罪は誰にあるだらうね。」

「……………」

「私の考へでは妻として務めが……………夫に對する愛情が充分ぢやない爲めに、夫が

不満を抱いて、心の悶ひを癒さんとて、夜遊びをするんぢやなからうかと思はれるね。」

「それはさうかも知れませんが、保が私に對してそうした感じを持つてゐるのでしたら、私は出来るだけの力を注いで愛しますけれど、保の夜遊びはさうぢやないのです、その證據には私を散歩に連れて行くではなし、無理につれて行つてくれと云へば怒るし、藝妓が親友だなんて云ふんですもの。」

「そいつは困つたものだなア……一體一時的の熱情に浮かされて、發作的の戀からして、前後の考へもなく、理解もなく結婚したのが非常な間違ひさ。」

「それはお兄様が仰有らなくとも、私は今始めてそれを知つたのです……ですか、私お兄様にお願ひがありますのよ。」

「義兄妹の仲だ、何も遠慮はいらん、私で來る事なら相談に乗るから、何んだか云つて御覽ん。」

「私、黒川の家を去りたいと思ひますの。」

と、文子は思ひ切つて云つた。

「ウム、そして何うするつもりだね。」

「聞いて下さるでせうか。」

「さア、お前の決心を聞いて、それがお前の爲めに有利な事であれば、私は賛成するよ。」

「私は、神の御前で今一度清い生涯に入り、これから第一歩の石段をきづき上げやうと思ひますのよ。」

「ウー………ム。」

と、正行は暫く兩眼を閉ぢて、ジツと考へてゐたが、靜かに眼を開いて。

「それもよからう。」

「ぢや、お兄様は聞いて下さるのですわねえ。」

「それもだ、保君に對して、すべてをつくして愛を捧げて見て、そして駄目だったら、さうする方がいゝかも知れんな。」

「有難う、お兄様、私、今までの行爲から脱して、改めて眞面目な新しい生活に這入りますから、何うか安河の家に置いて下さい、ね、お兄様。」

「ウム、いゝとも、お前の古巢だ、いつ戻つて來たつて、誰も何んとも云ひやしないよ。」

「有難う、あゝ、私はこれで始めて幸福な光りに照された様な氣持ちがいたしますわ。」

と、静かに立ち上つて。

「兄様、それではまたお目にかゝります。」

「ウム。」

と、頷いた。

「さよなら。」

と、文子は頭を下げた。

「お前は何處かへ行くのかね。」

「東京へ歸ります、そして省三兄様の處へ致へをうけて來ます。」

「よからう、身體を大切にしてくれ。」

「はい。」

「省三にくれぐもよろしく云つておくれよ。」

「はい。」

と、應へて、文子は、しほくとして立ち去つた。

「あゝ、人の子は涙多いものだなア……………」

と、正行は吻つと熱い吐息をした。
ジツイツと考へ込んでゐると、バタ／＼と可愛らしい足音がするので、正行はヒ

ヨイと顔を上げて見た。

すると眼の前には可愛い、六つか七つ位の男の子が立つてゐて、ニコく笑ひながら正行を見てゐた。正行は吃驚して立ち上り。

「お前は何處から這入つて来たんだね。」

「僕ね、あつちから。」

と、枝折戸の方を指さした。

「何うして来たのかね。」

「爺やに連れられて来たの。」

「名は何んと云ふの？」

「僕、正夫と云ふのよ。」

「苗字は？」

「安河……………」

「えッ、何ッ安河……………」

と、正行は吃驚して。

「そしてお前のお父様は何をしてゐるの。」

「豪いんですよ。」

「ほう。」

と、正行は子供の無邪氣につり込まれて、ニコくして聞いた。

「僕の父様は華族よ。」

「何んだね。」

「子爵。」

「名前は何？」

「安河正行つて云ふのよ。」

「お母様の名は。」

「知らないの。」

「ウム、さうか……………」

と、涙の眼で子供の顔をジツと見下して。

「此處はお前の来る處ぢやないから、お歸りなさいよ。」

「厭だ、僕ね、爺やに聞いたんだけど、をぢ様は僕のお父様ですつてね。」

「えッ。」

「だからお父様と云つてもいゝんでせう。」

「……………」

「僕ね、村の子供に苛められるのよ、お父様がないぢやないかつて……………」

「正夫の眼にも美しい露が宿つてゐた。」

「坊やは、それ程お父様に逢いたいのか。」

「僕逢いたいなア、夢にはねえお父様を見る事があるけれど、まだ眞實のお父様に

逢つた事はないの、だけど僕のお父様は坊を可愛がつてくれないでせうねえ。」

「何故か。」

と、云つた正行の聲は何故かふるえてゐた。

「だつて、いつまでも逢いに來てくれないんだもの……………お母様も毎日泣いてゐますよ。」

「お……………」

と、正行は胸一杯になつて、ほろ／＼と涙がとめどなく頬に傳はつた。

「をぢ様は泣いてゐるのね、弱虫だなア、僕は強いから泣かないのよ。」

「いちらしいこの言葉に、堪らなくなつて正行は横を向いた。

その眼に映じたのは、遠くの樹のかげで、佐吉が兩手を合せてゐたのが見えた。

「をぢ様、お父様と呼んでもいゝの。」

「あゝ、いゝとも、私はお前の眞實のお父様だよ。」

『お父様……』

『おう、坊やか……』

二人は堪なくなつて抱き合つてサメくと泣いた。

子供探して

お君はつひに氣が狂つた、正夫を奪はれて發狂した。

日も暮れ近い濱邊は、漁師の子供や女房が、父や夫の歸りを待つて。ザワついて

ゐた。

『正ちゃん、正ちゃん……ん。』

と、氣が抜けたお君は亂れた姿の儘で、素足で砂地を踏み乍ら、

『正ちゃん、正ちゃん……ん。』

と、叫んで歩いてゐた。

『あれッ、何をやるのです、私はどんな事があつても子供を渡すことにはなりません……いえ、私は正夫に一日だつて別れてゐる事が出来ませんから、それだけは許して下さい。』

と、云ひ乍ら、サメくと泣くかと思ひば。

『あれ〜正ちゃん、風が上つた、上つた、ほら〜……風が……』

と、げら〜笑ふ。』

『村の子供等がゾロ〜とついて来て。』

『やア、正坊の阿母が氣狂ひになつた……正坊の阿母は氣狂ひだア……』

と、騒ぎ立てた。

『おい〜、阿母、正坊は彼方に居るよ。』

と、鼻汁たらしが云ふと。

『嘘々……、正ちゃんを返して下さい……』

と、お君は子供達を追つた。

「わッ。」

と、一同は逃げ出した。

「死んだつて渡すものですか……いえ、何んと仰有つても不可ません。」

と、濱邊に坐り込んでサメと泣いた。

漁師の女房連は可哀相に思つて。

「何うして氣狂ひになんかなつたんだらうねえ。」

「男に捨てられたんだらうよ。」

と、チビの婢が鼻をしゃくつた。

「だつて、お前、あのお君さんは、なか／＼の堅人で、田舎大盡が百幾十日と通つ

たけれども、駄目だつたと云ふぢやねえかい。」

と、印度人の女房らしいのが慇懃云つた。

「だけど、人間つて奴は見かけに寄らねえからなア。」

と、爺らしい漁師が口を出した。

「ぢや太十どんはさうだね、どうりで嬢泣せだよ。」

「ふざけるねえ。」

と、ヒツと手鼻をかんだ。

「御前様……私、私は唯の身體ぢや御座いません……え、もう三ヶ月になり

ます、屹度々々若様は大事にお育て申します。」

と、お君は突然こんな事を云ひ出したので。

「それ見ろよ、權助の阿母、今お君坊が云つたちやねえか、三ヶ月だとよ、若様は大事にお育て申しますと云ふからにや、華族様へ奉公に上つて、お手がついてお暇になつたに違えねえせ。」

「さうかなア……」

「え、何うしても渡す事は出来ません、そりや安河の邸へ歸りたいは山々ですけれど、正夫をお返しする事は出来ません、私は事情あつて離別にはなりましたけれど、御前様は再び呼ぶまで待つてゐよと仰有つたのです、それなのに省三様からは何んにもお便りはなし、御前様からも、御通知のないのに嫂さんが突然被來つて子供を連れて行つて、元の鞆に納めるなんて、何んだか不可しいわねえ……折角の御親切は有難う御座いますけれども、正夫は何うしてもお渡しは來出ません。」

と、お君はスツクと立ち上つた。

「太十どんや、お君さんは華族の奥様だつたのだけ。」

印度人の女房が、お君に同情して、恚う云つた。

「何うしてだい。」

「だつて事情の爲め離縁になつたんだと云ふぢやねえかね。」

「なる程な。」

「省三様とか云ふ人と密通ゐたのに違えねえよ、その爲めに離別になつたらうね。」

「兄さん、兄さん、省三様が被在つて、御前様からのお言傳よ。」

と、お君はフラ／＼と歩き出した。

「さア、また解らなくなつたぞ、省三様が被來つて、御前様のお言傳だとよ、するてえと省三つて人とは密通はしてゐなかつたらしいよ、眞逆色男に傳言をして、よこす奴もねえからな。」

「違えねえ、まつたくそれもさうだなア。」

と、一同はお君の事で、仕事はそつちのけにしてワイ／＼と騒ぎ立てた。

「併し可哀相なもんだなア。」

「子を思ふ親の人情は誰も同じだが、嗚、子供を連れて行かれた時の心持ちは、まアどんなだつたらうねえ。」

「そりやまつたくさ、私等だつて大切な子供を人さらひにでも取られてみねえ、氣が狂ふかも知れねえよ。」

「眞實になア。」

「お君さんは可哀相だよ。」

「一體、どいつが正坊を連れて行つたんだい、解つたらブツ殺してしめえねえ。」

「伺しても早く正氣づけてやらにや、可哀相だよ。」

「いゝやな、あゝして置くがいゝやな。」

「何故。」

「俺ア、あすこの家で、大福餅の借があるんだから、氣がつかねえ方がいゝと、忘れてゐるから。」

「馬鹿こけえ……一體、どの位の借金だね。」

「五錢だよ。」

「この野郎五錢ばかりの借金を踏み倒す丁見かいな。」

「五錢だつて勿體ねえから、やらねえ方法を考へたが、まアあの分ちや生涯直りつこはねえからね。」

「呆れたものだよ、だから太十どんには女が惚れねえのさ。」

「戲談云ふねえ、さう馬鹿にしたもんぢやねえとも。」

「へえ、それでもよく太十どんに惚れる物好きな女もあつたものだ、一體談だい。」

「角の車屋の赤ブチよ。」

「あゝ、車屋のつて……年頃の娘はゐねえ筈だが……ブチ……ブチ……ブチ……と、一人の男が頻りに考へ込んでゐたが。」

「ブチと云ひや犬ぢやねえか。」

「ブツ呆れらあ、尤もお……は人間の娘ツ子は惚れつこはねえや、ブチ位の犬の女が當世向きのお前の情婦さ。」

「道理で犬くさいと思つたが、毎晩抱いて寝るのか。」

「馬鹿にするねえ。」

と、一同はお君を取り巻いて、わい／＼騒いでゐると、人垣を分けて出て来たのは省三であつた。

「おう、嫂さんちやありませんか、どんなに探しましたか知れませんが、さア兄さんの處へ行きませう。」

と、省三はお君の手をとつた。

「厭です／＼、正夫を連れて行かれては、私は御前儀に對して逢す顔が御座いませぬ、返して下さい、坊やを返して下さい。」

と、省三の胸倉をしめた。

「え、正ちゃん返しますよ。」

「さう、嬉しいわ、さア早く連れて来て下さい。」

「併し正ちゃんは邸へ歸つてゐて、嫂さんの被來るのを待つてゐるのですから、早く私と一緒に歸りませうね。」

「駄目、駄目、皆なそんな事を云つたつて、私はこんな不幸な目と逢ふのは運命だと諦めてゐますのよ。」

と、サメ／＼と泣いた。

「嫂さん、貴女の歸るのを兄さんも待つてゐますから、早く歸つて、もとの楽しい家庭をつくつて上げて下さい。」

「それだつていつの月日の事やら………」
と、シク／＼と泣く。

「嫂さん、しつかりして下さいよ、私は省三です、正行の弟です、嫂さん私が解りませんか。」

「まア、貴女は珍しい、嫂さんちやありませんか、………黒川さんの奥さんになつ

たんですつてまア、お目出度う御座いますわねえ。」

と、云つて、お君はほゝゝと笑つた。

「えッ、黒川の奥さん……………」

と、省三は不審ざうに思つた。

「伯父様の事よ……………あれ〜嫂さん、正ちやんを渡すことは出来ませんよ、折角もとの鞆に納めて下さると云ふ、お心は有難う御座いますけれど、正ちやんを山車につかふなんて、そんな事は厭です、第一私は正ちやんと一日だつて別れてはゐられないんですから、正ちやんを返して下さい。」

はゝア、こりや黒川の手の方が、無理に正夫をつれて行つたものと思はれるが、子供を山車にして安河家の財産横領しやうと、黒川の伯父がやつた事だな、こりや一大事だわいと、省三は胸の中で驚いたのであつた。

「あッ、正ちやん、お母様を置いて行つては不可ませんよ、嫂さん、返して下さい

返して……………」

と、お君はフラ〜と歩き出した。

「嫂さん、しつかりして下さいよ。」

と、省三はほと〜困り抜いて、泣き出したい様な心持ちであつた。

濱邊の人々はヒソ〜と話し乍ら、お君の身に同情の涙をそ〜いだのであつた。

さ ら ば

佐吉は正行と正夫の親子の對顔を、嬉し涙をうかべて、他所乍ら見て、そつと別荘を出やうとした時、四阿でヒソ〜と話してゐる兼子と唯也の姿を見つけた、その時にはもう保の姿は見えなかつたのであつた。

「悪黨共ッ、また悪い相談をしてゐやがるなッ、今に何うするか、覚えてゐら。」

と、佐吉は屹つとなつて、二人の様子を覗つてゐるとは露知らぬ二人は、やがて

立ち上つて門の方へ寄り添ふて行つたので、佐吉はそつそ忍び足に後をつけた。

「ねえ、黒川さん、貴方と私とは深い契りを結んだ事も度々ですよ、今更になつて捨てるなんぞと云ふ薄情な事はなさるまいね。」

「貴女もくだい方ですね、先刻も云つた通り、私より貴女こそ私を捨てない様にして下さい。」

「え、捨てるものですか。」

「まア正行の實印を取り上げて、財産を全部此方のものにすれば、貴女と私は楽しい日を送る事が出来るよと云ふものですから、早くさうしたいもんですな。」

「え、屹度、二三日のうちに取り上げますから、御安心なさいよ。」

「それではこれから料理店へ行つて、前祝ひに一杯やりませうかな。」

「結構ですね。」

「邸の内は人目がうるさいですからな。」

「眞實ですよ、貴方にシミと介抱して頂く事も出来ないんですもの……」
と、甘い風して、出て行く二人の姿を見ては、もう佐吉はジツと怵えてゐられなかつた。

フト傍を見ると植木屋の忘れて行つたのか鍬があつたので、それを小脇に抱えてドン／＼と二人の後を追つて、海岸の松原の處へ來ると。

「待て……、姦婦姦夫、間男見つけた、お家を横領しやうとする悪人共、命を貰つたから、さう思ひ。」

「えッ。」

と、驚いた二人、左右に逃げやうとするので。

「もう逃すものかッ。」

と、佐吉は力一杯に釜子の肩へサツと切りつけた。

「あれッ、ひゝ人殺し……」

「汝ッ、何をするッ。」

と、黒川は組みついて来た。

「野郎、しやれた真似をしやがつてッ。」

と、どんと脛をついた。

脾腹をうたれて、

「ウ……………ム。」

と、唸り乍らよろめく處を、發止とばかりに打ち下せば、腦天ヘザツクと鐵の刃が喰ひ込んで。

「わッ。」

と、叫んで唯也は倒れた。

此の時、兼子は必死になつて。

「ひ、人殺し……………」

と、金切聲を上げて逃げんとするや、血走つた眼でグッと睨んだ佐吉。

「まだ死なねえか、毒婦奴ッ。」

と、横に拂つた鐵の、兼子が腹へ刺し込んだ。」

「ぎやッ。」

と、變な聲を出して、兼子は死んでしまつた。

處が運悪く此處を通り合せた保は、父の一大事とばかりに馳けつけて来た。

「野郎、父の敵ッ。」

と、ステッキを振つて、佐吉に打つてかゝつた。

「汝は惡人の片われだッ、飛んで火に入る夏の虫てえのは、手前えの事だ、往生しやがれッ。」

と、二人は激しい格闘をつづけたが、ねらひを定めて投げつけた鐵が、保の喉に當つたので。

『ぎやア……………』

と、云つて保は倒れた。

三人とも命のなくなつたのを見て、吻つと吐息して尻餅をついた佐吉。

『あゝ、とう／＼俺は此の世を去る時が来たんだ、けれど、御前様や省三様、お君にも逢つて、この由を告げ、今までの御恩になつたお禮を云つてからあの世へ行くとしやう。』

と、今ははや何の望みなき身の佐吉、力も抜け氣も落ちてフラ／＼と風の様に歩いて行つた。

* * * * *

幼ない正夫の口から、お君が正行の事を戀ひ慕つては、泣きの涙で日を送つてゐると聞いて、今はもうジツとしてゐられなくなり、正夫を先にして彼は戀しい妻に

逢いたくて、邸を抜け出た。

『お父様、こつち、此方よ。』

と、案内されて来る途中、ひよつこりと省三に逢つた、その傍には氣の狂つたお君が淋しい顔して立つつてゐた。

『おう、兄様。』

『省三か。』

『嫂さんを見てやつて下さい、嫂さんは正夫を黒川の手の者に奪はれて、兄様に申譯がないと云ふ心から、遂に氣が狂つてしまひましたよ。』

『えッ、それではお君はとう／＼氣が狂つたのか。』
と、慌て、抱きよせ、

『これ、お君、正行だ、確りしてくれこれ、お君……………』

『お母様……………お母様よう……………』

と、正夫はお君の腰に縋りついた。

「嫂さん、兄さんも正ちゃんも、此處に居るんですよ、氣を確に持つて下さい。」

と、聲を勵まして叫んだけれど、魂の抜けたお君には解らなかつた。

「これ、お君……あゝ、とうとうお君は氣が狂つてしまつた……」

と、正行はほろ／＼と涙を流した。

「あ、正ちゃん……お母様を置いて、唯一人で何處へ行くのよ……」

と、空へ手を振り上げた。

「お母様、僕、こゝよ、お母様……」

と、正夫は泣き乍ら叫んだ。
この時であつた。
フラ／＼と風の様歩いて來た佐吉。

一同の姿を見て。

「おう、御前様。」

と、ベツタリ大地に兩手をついて、グタリとなつた。

「市川君、何うした、しつかりしないか。」

と、正行は確り抱き起した。

「市川君、省三だ、何うしたんだ。」

と、省三は佐吉の背中を強く打つたので、氣がゆるんで一時氣絶しかつた佐吉は、ハツとして我に返り。

「おう、先生、私はとう／＼また人殺しをしました。」

「何ッ、また人殺しをしたッ。」

「はい、黒川と、御母堂と、保さんを今松原で殺しました。」

「えッッ。」

と、正行も省三も倒れんばかりに驚いた。

「なんでそんな事をしてくれたのだ。」

「先刻若様をお連れ申して、御前様のお手に渡して歸らうとした時に、四阿で財産を横領する相談をしてゐました、それに黒川と御母堂は道ならぬ關係まである仲なんです。」

「えゝッ。」

「とうてい、この人達が居つては安河家は一生涯安らかでないと知りましたので、何うせ命のない身體一人殺すも二人殺すも同じ事故、一層の事と……とうとう三人殺してしまひました。」

「あゝ、それも運命だすべて、神様の思召なんだ。」

と、省三は天を仰いで、サメぐと泣いた。

「佐吉、此の先は何うするつもりなんだね。」

と、正行は泣き乍ら聞いた。

「はい、私は御前様や先生にお別れして、警察へ立派に自訴して出て、刑をうける決心で御座いました。」

と、涙を拂つて。

「御前様……先生、何うぞ御無事で、お暮し遊して下さいまし。」

「佐吉、お前一人は行くとも辛くはなからうが、後に残るお君に別の一言云つてやつてくれ。」

「はい……………」

と、よろしくとして立ち上り、お君の手をとり。

「お君、俺ア人殺しの罪で監獄へ行くんだが、もう長え命ぢやねえが、何うか身體を大切に、御前様にうけた俺等二人の御恩をお返し申してくれよ。」

「厭です、厭です……正ちやんを返して下さい。」

「えッ、若様はお前の傍においでぢやねえか、何うしたつてえんだ。」

「市川君、嫂さんは黒川の手の者に正ちやんを奪はれて、兄さんに對して濟まない
と云ふ一途から、とう／＼氣が狂つたのだ……………」

「えッ、ぢやあのお仙の爲めに……………あ、俺等兄妹は何んてえ惡運なんだらう……
…兄は罪人……………妹は氣狂ひ……………俺ア、もう何うして、いゝか解らなくなつてし
まつたア……………」

と、地に伏して、サメ／＼と泣いた。

「佐吉、心配するな、必ずお君の心を直させて、一生涯私の妻とするからに、決
して案ずる事なく立派に刑をうけてくれよ。」

「有難う御座います。」

と、悄然と立ち上つて。

「それでは御前様……………」

「おう、もう行んか。」

「はい、先生……………」

「市川君。」

「何うぞ、御無事で、幸福に世をお送りなせえまし、俺ア草葉の蔭で祈つて居りま
すよ……………」

と、泣きの涙の正行省三に見送られて、悄然と行く佐吉……………」

「爺や、待つてよう。」

と、馳けよつて縋りつく正夫、ひしと抱きしめた佐吉はポロ／＼と涙を落して。

「若様……………豪え人になつておくんなせえましょ。」

「僕も一緒に行くんだから、つれて行つておくれ。」

「おう、そのおやさしいお言葉、お連れ申したいは山々なれど、行けぬ處へ行く身
にや若様はお連れ申す事は出来ません……………」

「でも、僕は行く……………」

と、尙も縋りて放れずに、よろ／＼と引かれてよろめく佐吉、鬼をひしぐ力はあ
れど、正夫のいちらしい心には負けるばかり。

「正夫、爺やを泣かせるなよ……………」

と、ソツと正行が引きよせれば。

「それぢや皆様……………」

と、佐吉は頭を下げる。

「爺や……………さよう……………なら……………」

「正夫の悲しい別れの言葉に、

「おゝ、若様……………」

と、云ひと思ひ切つて踏み出すあの世への道……………」

「ほゝゝゝ、風が上つた風が……………」

と、突然笑ふお君……………」

兄が死に行く門出とは知らず、あゝ何んたる憐れぞや。

互ひに見送る眼と見返る眼には、唯涙の雨はら／＼と――。

しほ／＼とふり返りつゝ遠のいて行く佐吉の憐れな姿は遂に夕暁にかすれて行つ
て、涙にかすむ眼に見えず、聞ゆるものは波の音のみ、いと悲しげにゼア／＼と……

……………。(完)

大正九年八月一日印刷
大正九年八月四日發行

【定價六十錢】
（郵費金六錢）

不悲い
許劇ろ
製小説草

著者 絹川露衣

發行者 東京市淺草區瓦町二十四番地
中村惣次郎

印刷者 東京市淺草區小島町七十三番地
中野敏三郎

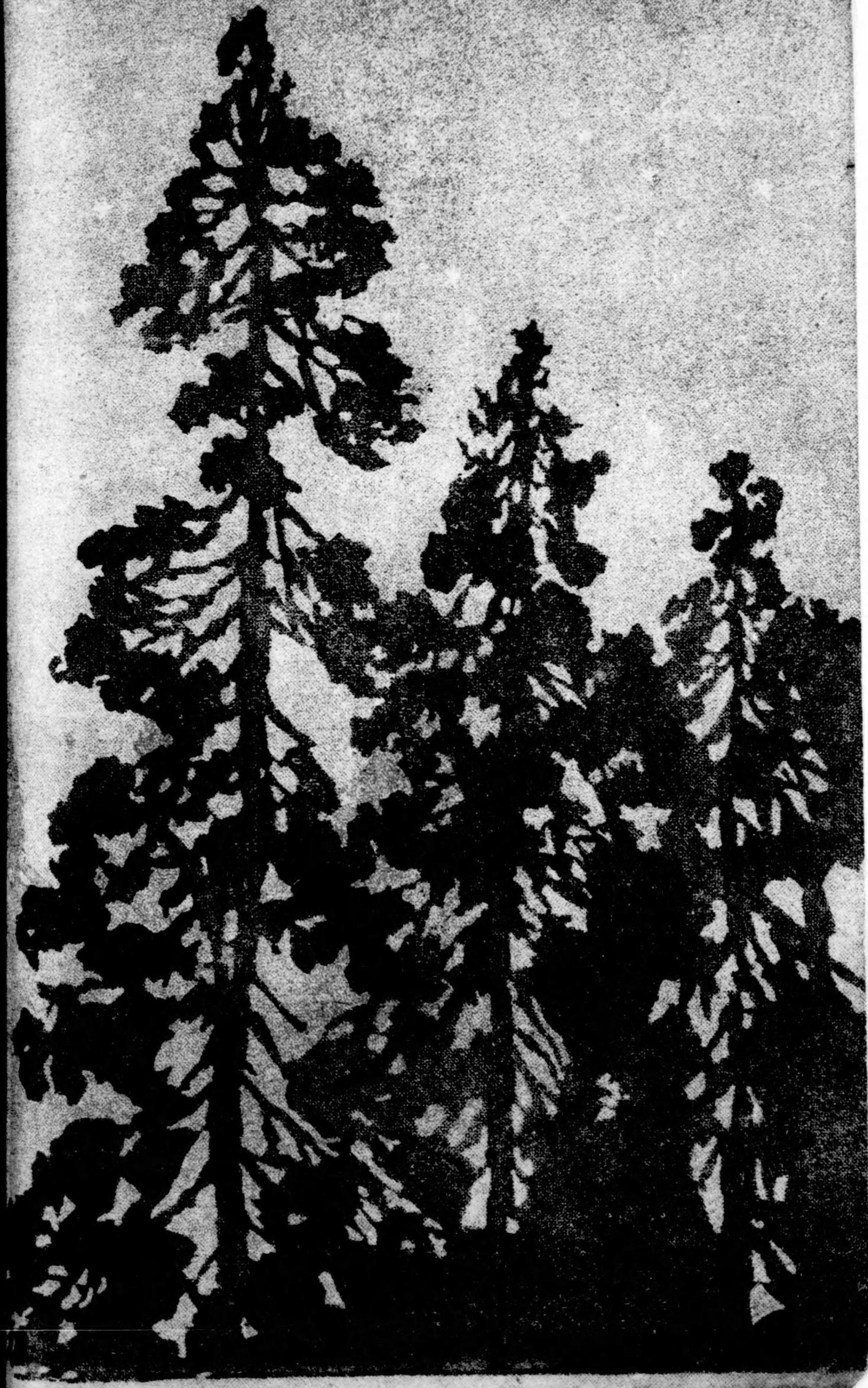
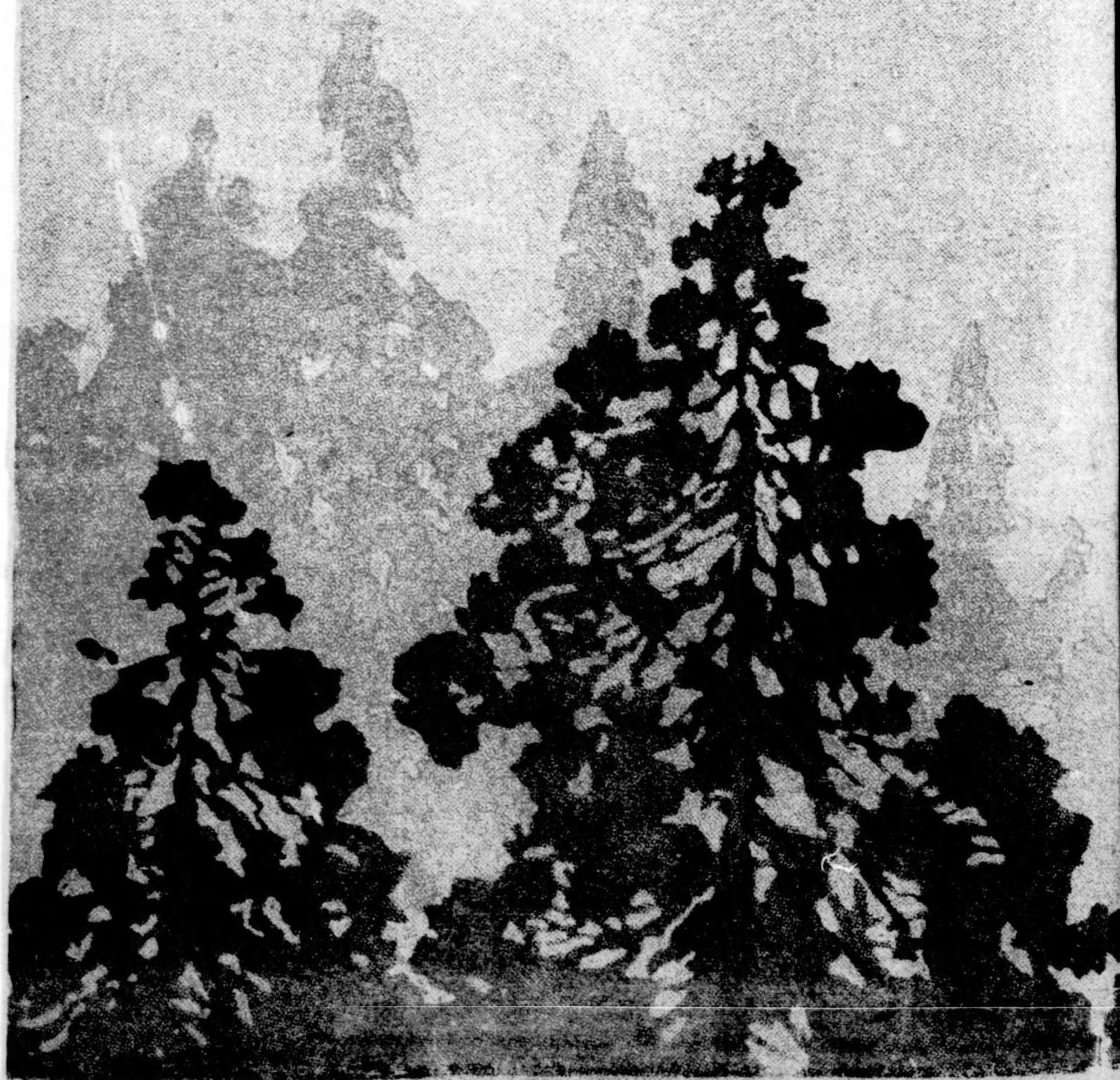
東京市淺草區瓦町二十四番地

發行所

中村日吉堂

電話下谷四九三一
東京一六一六

187
119



終

